

長沢栄治著

# 『エジプトの自画像』

——ナイルの思想と地域研究——

(東京大学東洋文化研究所研究報告 東洋文化研

究所叢刊 27)

平凡社 二〇一三・三刊

A5 三五二頁 五四〇〇円

二〇一一年一月二五日、エジプトで「一月二五日革命」と呼ばれる政治変動が起きた。国内外のメディアでは、エジプトは「第二共和制」を迎えるとの報道がされてきたが、こうした経験を経たエジプトとは、どのような国なのか？本書は右のような問題意識に基づき、歴史と地理によってエジプト人という民族を見出そうとしたガマル・ヒムダーンの大著『エジプトの個性』をエジプトの灌漑史を舞台に読み直し、アラブ、イスラーム教、グローバル資本主義など、いまなお変容し続ける現代エジプトの姿を描き出そうと試みる研究書である。

本書の構成は以下の通りである。

序論…近代エジプトの国家と社会、第一部…ガマル・ヒムダーン『エジプトの個性』の世界、第一章…エジプトの中央集権性—ガマル・ヒムダーン『エジプトの個性』研究(1)、第二章…エジプト知識人と文化的重層性—ガマル・ヒムダーン『エジプトの個性』研究(2)、第三章…地域の思想と地域研究—ガマル・ヒムダーン『エジ

プトの個性』から学ぶもの、第二部…エジプトの灌漑制度の歴史と現状、第四章…近代エジプトにおける灌漑制度の展開、第五章…灌漑制度改革の新段階、第六章…ベイスン灌漑に関するノート、第七章…アスワン・ハイダムの建造が環境に与えた諸影響をめぐって、第八章…「ナイルの賜物」の行方—エジプトの環境問題

本書は序論の小論、第二章から第三章までの第一部、そして第四章から第八章までの第二部から構成されている。序論においては、第一部と第二部をつなげるために近代エジプトの国家と社会の関係が小論として論じられている。第一部では、ガマル・ヒムダーンというエジプト人地理学者の『エジプトの個性』の内容を紹介し、彼の理論を整理している。第二部では、近代エジプトの灌漑制度の発展と現状が論じられている。ここでは、第一部で検討されているガマル・ヒムダーンの著作で展開される論理の検証が、エジプトの灌漑史の文脈のなかに位置付けられ、検証されている。

紹介者の関心に沿えば、本書で注目すべき箇所は、第二部で論じられているエジプトの灌漑史の歴史、とりわけ一九七〇年代からエジプトの諸県で行われている灌漑制度改革である。ここでは、ドナー国であるアメリカやカナダ、日本などからの援助金を通じて行われた水利プロジェクトや「水利組合」の設立を中心にして論が構成されている。そして、農民による自律的な灌漑水の利用の形態の変化が、文献調査と筆者の行った現地調査に基づき論じられている。

最近の「水の政治学」や水資源の管理をめぐる諸研究を鑑みれ

ば、ウィットフォーゲルの「オリエンタル・デイスポテイズム」において展開される農村までを射程に入れた国家主導の一元的な灌漑水の管理という主張に対しては、様々な角度からの検証や評価が改めて行われている。こうした潮流のなかで、本書は、乾燥・半乾燥地域にある諸国家の水の管理のありかたを検証する最先端の研究として積極的に参照されるべきであろう。(西舘康平)